

島村哲夫著 『鐵鋼經濟論』

昭和三十三年十月、東洋經濟新報社刊

北 原 三 郎

この書は昨年十月刊行されたものであるが、非常に良書と思われたので敢えて書評を書いて見たのである。

鐵鋼の經濟論的な一般書で、終戦後發刊され、手頃な良書と思われるものに、刊行の年順に、市田左右一「鐵鋼」、市川弘勝「鐵鋼」と、この島村氏の鐵鋼經濟論の三書がある。市田氏の書は昭和二十五年にダイヤモンド社より發行されたダイヤモンド産業全書の一部で、これは鐵鋼業の常識を、鐵鋼の本質、歴史、資源、製造、企業にわたって、産業人に啓蒙的に書かれたものである。

市川氏の「鐵鋼」は昭和三十一年に岩波新書として發行されたもので、岩波新書らしい書き方である。市田氏もつぎの島村氏も九大の工學部出身のその方面の技術者であるに反し、市川氏は東大の經濟學部出身で評論的な立場、社會主義的な見方で書かれている。これに對し島村氏の書は純粹な技術者としての立場で書かれている。

この本は序文にもあるように著者が昭和二十七年から昭和二十九年にわたる三年間、東大の經濟學部で産業論の一部として講義されたものをまとめ、さらにつけ加えられたとのことである。

講義のときはがり版の印刷でその厩大なテキストを聽講した學生に一部ずつ贈與せられたそうで、これはその當時島村氏は八幡製鐵の常務をされていたので、そういうことも出来たのだと思われる。

前述の二つの本が一般概論的なものであるのに對し、この本は東大で講義されたものだけにアカデミックな感じがし、深味のある専門書である。著者は九大工學部を卒業後八幡製鐵に入所三十年にわたり、鐵一筋に生きて来た人だけに技術的知識は深く、その著者が經濟と關連する鐵鋼業の諸問題を學問的に解明されている點は從來の鐵鋼解説書とはかなり違っており、その評價は高いものと思われる。データも新しく、項目の配列もよく、程度はかなり高い。

日本の鐵鋼産業の特長は、終戦後重要な輸出品になったことと、その原料がほとんど海外に依存することである。それだけに技術的な問題も經濟的な問題も多い。そこでそれらの諸問題について日本の立場と海外の立場を常に對照させながら論じている。

七章に分かれており、第一章は鐵鋼業計畫の基礎的條件に於いて、企業として鐵鋼業をおこし、また維持して行くには現在及び將來の經濟面の豫測が重要な役割を果すのは當然であるが、そこには多くの變數を含み、困難な豫測がどうしたら立てられるか、鐵鋼需要の見通し、生産原價、販賣價格、それに付隨して製鐵所の立地、規模、製鐵様式、労働條件など重要な問題であるがこの章でこれら基礎的問題を明らかにしている。

第二章では鐵鋼原料について述べている。原料は鐵鋼石、石炭、屑鐵が主であるが、鐵鋼石と石炭については、世界の埋藏量、世界におけるそれらの動きと各國の生産量、輸出入量が詳しく書かれ、屑鐵については屑鐵が重要な原料でありしかも價格の變動が著しくなり勝つものであり、我が國には特に重要なものだけに屑鐵市場の問題もよく論ぜられている。

第三章は鐵鋼技術の進歩についてである。技術については一般解説書では理工學的な面もかなり書いてあるが本書には既知のものとして取扱われ、すべて經濟的な立場で論じられている。しかし世界の鐵鋼技術の進歩の傾向は詳述されている。設備の規模が大きくなる傾向、原料の相異による各國特有の對策がよく述べられている。ことに日本の場合原料炭を海外遠くアメリカから輸入しているので、生産費を少くするため銑鐵一トン當りのコークス比を如何に減少させたかも知ることができ。さらに戦後設備資金が多額に投ぜられたストリップミルなどの壓延關係についてもよく書かれている。

第四章においては第二次大戰後、とくに一九五一年以降の國際市場における鐵鋼取引の狀態とそれに關連する問題が述べられている。全般の貿易が世界の政治的、經濟的構造の變化を反映して戦前とちがった様相を呈しており、鐵鋼貿易もそうした影響を受けているので、第二次大戰後の國際貿易の推移から説きはじめ、つぎに世界の鐵鋼貿易、さらに日本の鐵鋼輸出が述べられている。國際市場の動き、價格、輸出價格の變動、日本の貿易に占める鐵鋼の地位が説かれている。

第五章に鐵鋼業の組織が共産圏を除く海外の各國について述べられている。鐵鋼業は巨額の投下資本を要し、固定設備が膨大であり、各産業部門に關連を持つ基礎資財を必要とし、資本財工業として景氣變動の影響をとくに強く受けるなどの特殊性を有しているから鐵鋼業の組織化が次第に進展して來た。この組織化について著者は純技術者の立場で論じており、イデオロギー的な見方はしていない。

市川氏はこの組織化は獨占資本の獨占化としているが、島村氏は生産性向上や生産原價低減のための當然な趨勢としている。この章の終りに國際鐵鋼カルテルについて述べているが、共産圏については何等觸れていない。

つぎの第六章に日本鐵鋼業の發展、第七章に日本鐵鋼業の課題が述べられている。二章にもわたって書かれていることは日本にとって現在鐵鋼業が如何に切實な重大問題であることを示すものであろう。戦前鐵鋼の輸入國であつた日本が、今は鐵鋼は重要な輸出品であり、原料、生産、貿易に多様な問題を包含しているので、この二章に書かれてあることは切實に身近かに感ずる問題ばかりである。

本書は鐵鋼業計畫の基礎的條件、原料、技術、貿易、組織、日本鐵鋼業の發展、課題について専門的な、學問的な基礎の上に書かれているが同様な著書がその他一般の重要商品例えば纖維、非鐵金屬、セメント、肥料その他について行われたならば産業全般にとって極めて有意義と思われ。そこに本書の極めて重要な意義があると思われた。

(一橋大學助教)